

自著と  
その周辺

## 保険薬局薬剤師のための もうビビらない！ がん関連処方対応術

宮田佳典 監修

中信がん薬薬連携推進ワーキンググループ (編)

南山堂

196ページ

2019年4月3日発行

定価: 2,800円+税

昨今、がんの薬物療法は入院から外来に大きくシフトしてきています。その要因は、仕事を続け自宅で家族との生活を送りながら治療を継続したいという患者の声が多くなったというのが第一ですが、薬物療法が進歩し、大きな症状なく生活できる時間が長くなったこと、副作用に対する治療（所謂「支持療法」）が進歩し、例えば悪心嘔吐などの強い副作用で苦しむことが以前より少なくなったことのような医学の進歩に加えて、外来化学療法加算が算定できるようになったことや、DPCで長期の薬物療法目的の入院では病院が赤字になってしまうことなどの医療制度の変化も外来治療を後押ししました。

がんの薬物療法はチーム医療です。医師だけではなく看護師、薬剤師、栄養士、医療ソーシャルワーカー等が常に外来治療を支えています。お互いに連絡を密にし、また刺激しあうことで病院内のがん診療レベルは確実に上がってきました。しかし長年の大きな問題は、処方されたがん治療薬を受け取る院外の調剤薬局が、どれだけがん治療を理解して患者に服薬指導をしてくれるかということでした。地域の薬剤師ががんに興味を持ってくれることを期待して、当院ではがんに関するセミナーを2011年9月に開始しほぼ毎月継続しています。また薬剤師会とタイアップし服薬指導の研修会を開くことで、地域の薬剤師との顔の見える連携及び全体的なレベルアップを図ってきました。その中心的役割を担った薬剤師の三浦篤史くんが相澤病院に移籍したのをきっかけに中信地区でも薬薬連携の輪が広がり、中信がん薬薬連携推進ワーキンググループが結成され、そのアクティビティは東信地区を凌駕するほどとなりました。ワーキンググループのメンバーがその活動内容を日本臨床腫瘍薬学会のシンポジウムで発表することが出版社の目に留まり、本書が企画されるに至りました。

本書の特徴は、多くの医学書のように疾患や治療の解説から治療薬の解説という流れとは違い、医師の処方箋1枚を元に患者の状況を推察し、そして患者との会話で得られた情報から推察が正しかったかどうかを判断し、更に患者の状況への理解を深め、そこから薬剤師がどんなことを考えて服薬指導に繋げていくのか、ということに主眼をおくような内容にしていることです。服薬指導のポイントを、実際の場面と薬剤師の思考回路に近い設定で解説しているので、極めてプラクティカルで薬剤師が理解しやすい構成になっていると自負しています。そして同じ章の後半には疾患や化学療法の解説を加えることで、もう少し学びたいという欲求に応えられるような流れとなっています。第1章で抗がん剤に関する服薬指導を学び、第2章は冒頭でも触れた副作用に対する支持療法について学びます。副作用マネジメントが化学療法成功には不可欠です。外来で遭遇しやすい副作用について、単なる羅列に終わらず、服薬指導や日常生活の指導方法についても記載することで、本書を理解すれば、副作用をコントロールし安心して自宅での生活が送れるような服薬指導が可能となるように心がけた内容になっています。そして第3章では、勉強会でよくあった質問や難解な専門用語について解説し、更に理解を深められるようにしました。

本書の上梓後、近隣の薬剤師からお褒めの言葉を頂きました。そして今年4月の診療報酬改訂で調剤薬局との連携に対して「連携充実加算」が算定できるようになったことは、薬薬連携に大きな追い風となるでしょう。

(佐久総合病院佐久医療センター 宮田佳典)